# 紀　　要

## 第 7 号

目　　次


二つの前方後円墳 ……(細川修平)… 1
滋賀県出土の埴輪資料集(その4) ……(稲垣正宏)… 27
近江へのアプローチ・その1 …… 43
　1．高島郡の地形と条里 ……(神保忠宏)… 44
　2．高島郡における遺跡の動態　―今津町周辺をフィールドに― …(畑中英二)… 50
　3．高島郡の古代寺院 ……(重岡　卓)… 57
　4．高島郡の鉄生産とその周辺 ……(大道和人)… 61
　5．高島郡の古代北陸道 ……(内田保之)… 66
　6．高島郡にみる古代国家 ……(細川修平)… 71
南北方位建物についての研究ノート ……(田井中洋介)… 77
近江京域論の再検討・予察―7世紀における近江南部地域の諸相― …(相原嘉之)… 83
滋賀県における古代の土器様相・その1
　―湖南地域における無台杯身・かえり付き蓋の変遷を中心に― ……(畑中英二)…104
江州農具雑想ノート ……(上垣幸徳)…126
滋賀県甲賀郡土山町における蔵王産花崗岩製中世石造美術の分布
　―土山町石造美術石材分布調査概要― ……(兼康保明)…131
滋賀県内出土漆製品集成―後編― ……(中川正人)…145



1994．3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 滋賀県における古代の土器様相・その1
## ――湖南地域における無台杯身・かえり付き蓋の変遷を中心に――

畑　中　英　二

### 1．はじめに

小稿では7世紀代の土器様相を良好な一括資料からうかがうことを主眼とするものであるが、滋賀県全域のものを対象とせず大津、草津市域を中心とした。滋賀県下では6世紀末から7世紀初頭にかけてほぼ郡程度の地域毎に須恵器生産地が開窯していることから、おそらくはほぼ郡程度の範囲に1カ所づつ存在する須恵器生産地がその所在する地域に供給したものであると考えられる(1)。しかし、必ずしも須恵器生産が連続して確認されないところも見られることから絶対的な郡単位程度の小域流通圏を形成したとは言い切れず、実態としてはそれに近いもの、或いはそれに準ずるものであろう。とはいえ、地域毎に生産が行われている状況を読み取ることが出来るということは、各地域の生産地、消費地でどの様な変遷を辿るかを検討するという作業を経てからでないと、滋賀県（近江）の須恵器というものとしては語り得ないのである。以上の点から、まずは比較的良好な資料の見られる大津、草津市域の土器群の一括資料を挙げることによりそれらの様相を明らかにし、その他滋賀県下の資料をもって補完することとしたい。

### 2．7世紀に於ける湖南地域の土器様相

以下に、湖南地域を中心とした一括資料を提示する。無台杯身とかえり付き蓋の形態について分類しているのでそれを参照されたい。（図版1）

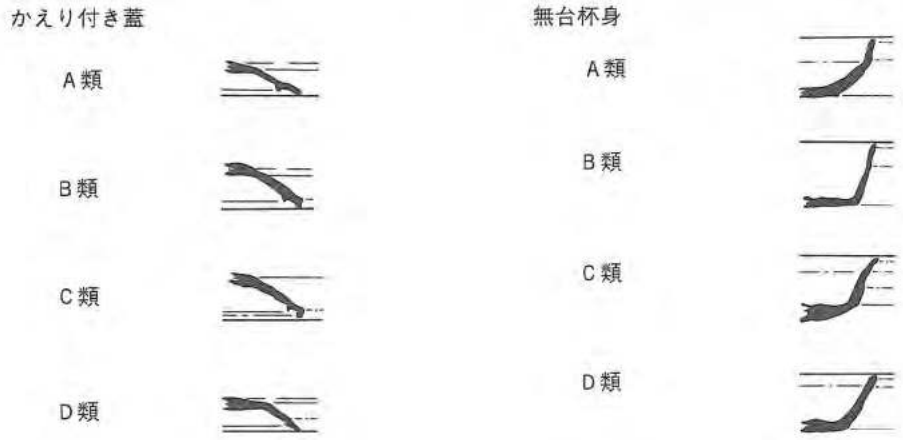



図-1　形態分類

（無台杯身）

A類―口縁部に強いナデを施し直立させるもの。

B類―丸みを帯びた２次底部面から直立気味に立ち上がる口縁部をもつもの。

C類―丸みを帯びた２次底部面から外方に開く口縁部をもつもの。

D類―平らな底部から外方に開く口縁部をもつもの。

（かえり付き蓋）

A類―外方に延びる口縁部を持ち、かえりを有する蓋。

B類―外方に延びる口縁部の端部に面を成し、かえりを有する蓋。

C類―下方に屈曲する口縁部を持ち、かえりを有する蓋。

D類―外方に延びる口縁部を持ち、極端に退化したかえりを持つ蓋。

(1) 大津市太鼓塚古墳群８号墳出土遺物[2]（図版２―１～３）

大津市太鼓塚８号墳出土遺物の器種構成は須恵器杯Gのセット７組のみであるが、後述の大津市山ノ神古窯灰原中層や、大津市横尾山古墳群出土の杯類と比べて調整の点で差異がみられるものである。無台杯身の底部には回転ヘラ削りを施す点に特徴がある。また、これらは横穴式石室からの出土であり、これら以外の遺物に関しては時期差がみられるがこれらは同一器種、同一形態であることから一時期のものであると考えて大過無いであろう。

須恵器無台杯身は、B類のみが見られる。須恵器蓋の端部の形状は全てA類である。調整は、天井部外面は回転ヘラ削りを施し、その他の部分については横ナデを施す。つまみの形状は、乳頭状を呈するものと、中央が凹んだものが見られる。後者は、古墳時代通有の高杯の蓋のつまみの形状に類似しており、それからの影響がみられるのではないだろうか。

(2) 大津市横尾山古墳群26号墳ｂ主体部出土遺物[3]（図版２―７・８）

大津市横尾山古墳群26号墳ｂ主体部は土坑墓であると考えられ、消費の一点を示すものとしてとらえることが出来る。

須恵器無台杯身は、全てA類である。調整は前述の大津市太鼓塚８号墳出土遺物に見られる調整方法とは異なり、底部は切り放し後不調整のままである。

土師器杯は、口径16.7cm、器高5.4cmを測る。口径と器高の比率は32.3である。
調整については、口縁部は横ナデ、体部から底部にかけては指押さえの後ヘラ削りを施す。

(3) 大津市横尾山古墳群19号墳出土遺物[4]（図版２―９・10）

大津市横尾山古墳群19号墳は土坑墓であると考えられ、消費の一点を示すものとしてとらえることが出来る。

須恵器杯Hの底部の調整は、切り放し後粗雑なナデを施し、他は横ナデを施す。

土師器杯は、口径15.5cm、器高5.6cmを測る。口径と器高の比率は36.1である。調整については、口縁部は横ナデ、体部上半はヘラミガキ、体部下半から底部にかけては指押さえの後ヘラ削りを施す。

(4) 大津市横尾山古墳群23号墳出土遺物[5]（図版２―４～６）

大津市横尾山古墳群23号墳は土坑墓であると考えられ、消費の一点を示すものとしてとらえる

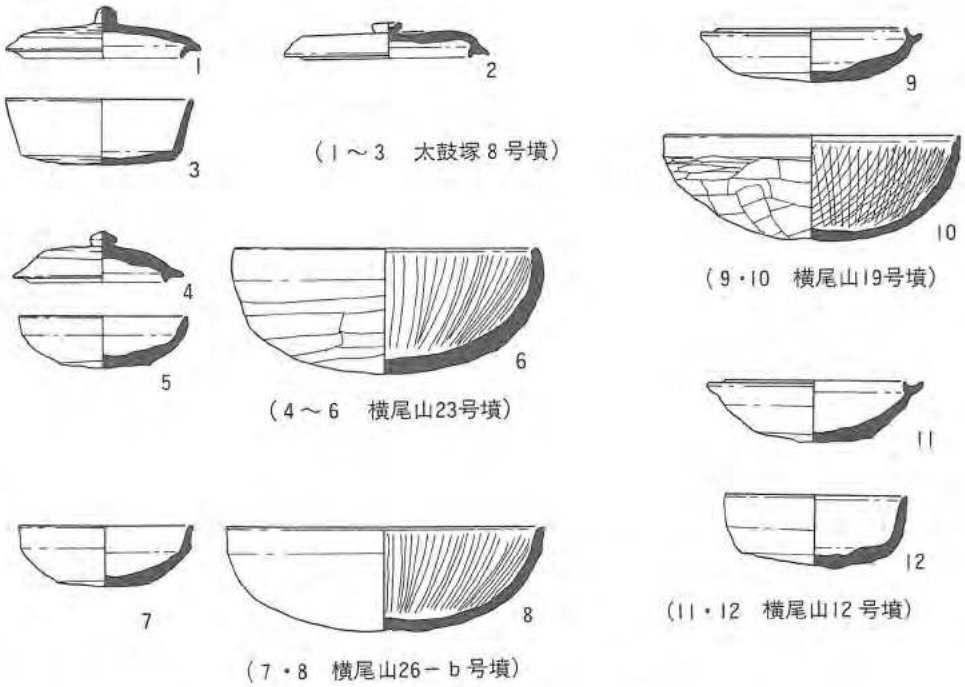



図-2　太鼓塚、横尾山古墳群出土遺物

ことが出来る。

須恵器蓋は、杯Gのセットとなるものと、平瓶の蓋になるものが見られる。調整は、天井部外面は回転ヘラ削りを施し、その他の部分については横ナデを施す。つまみは断面菱型を呈し、比較的端正な宝珠形をとどめている。

須恵器無台杯身は、形態からA類が見られる。調整は、底部切り放し後軽くナデを施し、その他の部分については横ナデを施す。

土師器杯は口径15.9cm、器高6.6cmを測る。口径と器高の比率は41.5である。調整は、口縁部から体部にかけてヘラミガキを施し、体部下半から底部にかけてヘラ削りを施す。

(5)　大津市横尾山古墳群12号墳出土遺物[6]（図版2—11・12）

大津市横尾山古墳群12号墳は土坑墓であると考えられ、消費の一点を示すものとしてとらえることが出来る。

須恵器無台杯身は、B類のみが見られる。調整は、底部切り放し後不調整、その他の部分については横ナデを施す。

須恵器杯Hの調整は、底部切り放し後不調整、その他の部分については横ナデを施す。

(6)　大津市山ノ神遺跡灰原下層出土遺物[7]（図版3—1～4）

大津市山ノ神遺跡灰原下層は、上面を粘土層にパックされた灰層であり、生産の一つの単位であると考えられる。後述の灰原中・上層についても同様に粘土層で層位関係が把握されている。

出土遺物の器種構成は杯Hのセットを主としており、若干の杯Gのセットがみられる。杯Gの

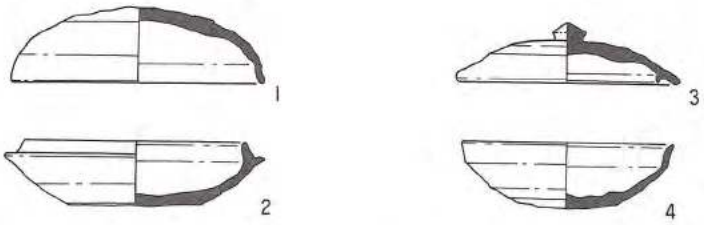



図-3　山ノ神遺跡灰原下層出土遺物

図-4　山ノ神遺跡灰原中層出土遺物

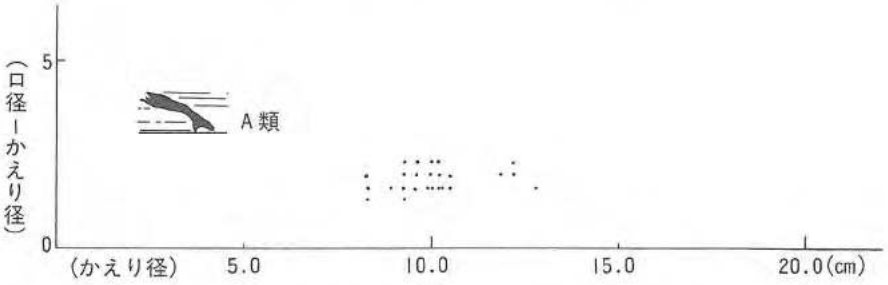



図-5　山ノ神遺跡灰原中層出土かえり付き蓋のかえり径と口径の関係

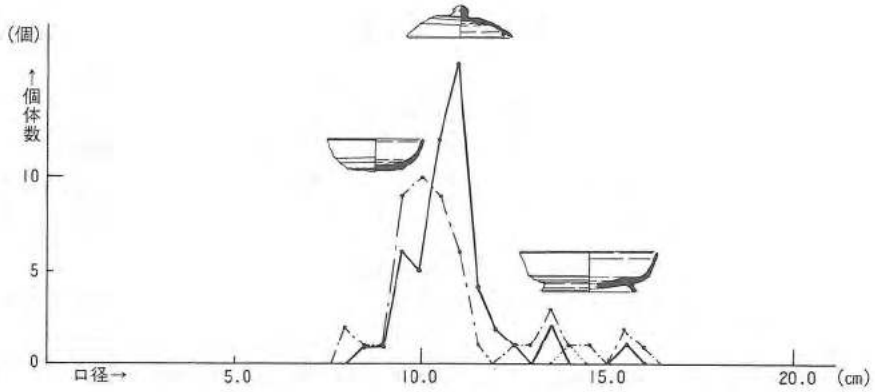



図-6　山ノ神遺跡灰原中層出土杯・蓋、口径対応表

セットとなる無台杯身はA類のみがみられる。

(7) 大津市山ノ神遺跡灰原中層出土遺物[8]（図版4—1～3）

大津市山ノ神遺跡灰原中層は、上下を粘土層にパックされた灰層であり、生産の一つの単位であると考えられる。後述の灰原上層についても同様に粘土層で層位関係が把握されている。出土遺物の器種構成は杯Gのセットを主としており、蓋の法量に大きなものがみられない点と有台杯身自体が1点しか見られない点から杯Bの生産はほとんどない段階であるといえるだろう。また、杯Hに関しては数点の出土が確認できるものの、灰原中層の生産量の総体からすると微量であり、一定量を占めることがない点から生産は終息したものであるととらえたい。

須恵器無台杯身は、A・B類が見られる。

これらの無台杯身の口径は、10cm前後を生産の最大のピークとし、8cm、13cm、15cm程度のものにも生産の小さなピークがみられる。調整は、基本的に底部外面は切り放し後不調整であり、その他の部分については横ナデを施している。

須恵器蓋の端部は、全てA類である。法量は小型のものが大半を占め、口径11cm程度を生産のピークとしている。大型のものも若干見られるが無台杯身の口径に概ね1cm程度の開きを持って対応しているといえる。調整は、天井部外面は回転ヘラ削り、或いは丁寧なナデを施している。つまみの形状は、きれいな宝珠形を呈している。

(8) 大津市山ノ神遺跡SK－3出土遺物[9]（図版12—1～4）

大津市山ノ神遺跡の須恵器窯に伴う工房の一角にある土器溜まりである。出土遺物の器種構成は山ノ神古窯灰原中層と同様杯Gのセットを主としており、有台杯身は1点も見られない。

須恵器無台杯身は、山ノ神遺跡灰原中層出土土器群とは異なり、A・B・C類が見られる。蓋の端部の形状は、全てA類である。

(9) 大津市山ノ神遺跡灰原上層出土遺物[10]（図版7—1～7）

前述の山ノ神遺跡灰原中層と同様、灰原出土遺物であるが粘土層によって明確に層位関係が把握されている。出土遺物の器種構成は杯Gのセットと杯Bのセットに加えて、杯Gのセットになるべき無台杯身に対応する蓋の数量が無台杯身の数量の約半分である点から蓋を伴わない無台杯身、つまり、杯Aが出現している可能性がある。また、杯Hが数点出土しているが、出土量から、灰原中層出土土器群と同様に生産は既に終息していると考えられる。ここでは、これらの遺物は混入したととらえておきたい。

須恵器無台杯身は、A・B・C・D類が見られる。これらの中でD類の生産は、A、B、C類と比較すると少量であるとみられる。生産のピークは、口径10～11cmを最大の中心とする。また、口径8cmから15cmまでのものが若干量みられる。調整は、底部外面は切り放し後不調整であり、その他の部分については横ナデを施す。

須恵器蓋の端部は全てA類である。生産の最大のピークを口径10.5cm前後にとる。しかし、口径14cm以降にもそれに準ずる生産のピークを持っていることから、灰原中層段階とは異なり、この段階になって杯Bの生産が一定量されるようになったと把えることができる。調整は、前段階である灰原中層と同様、天井部外面は回転ヘラ削りを施している。

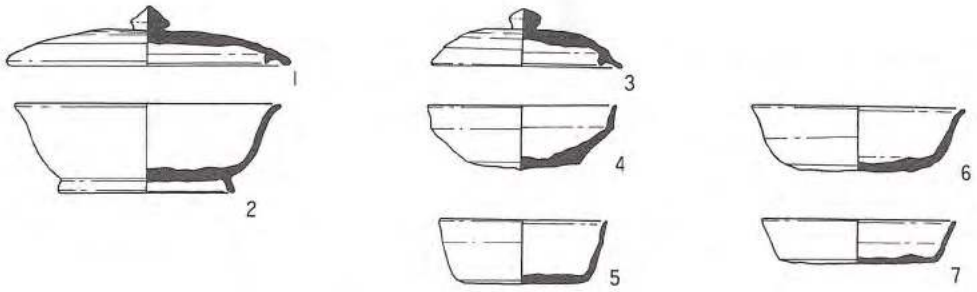



図-7　山ノ神遺跡灰原上層出土遺物

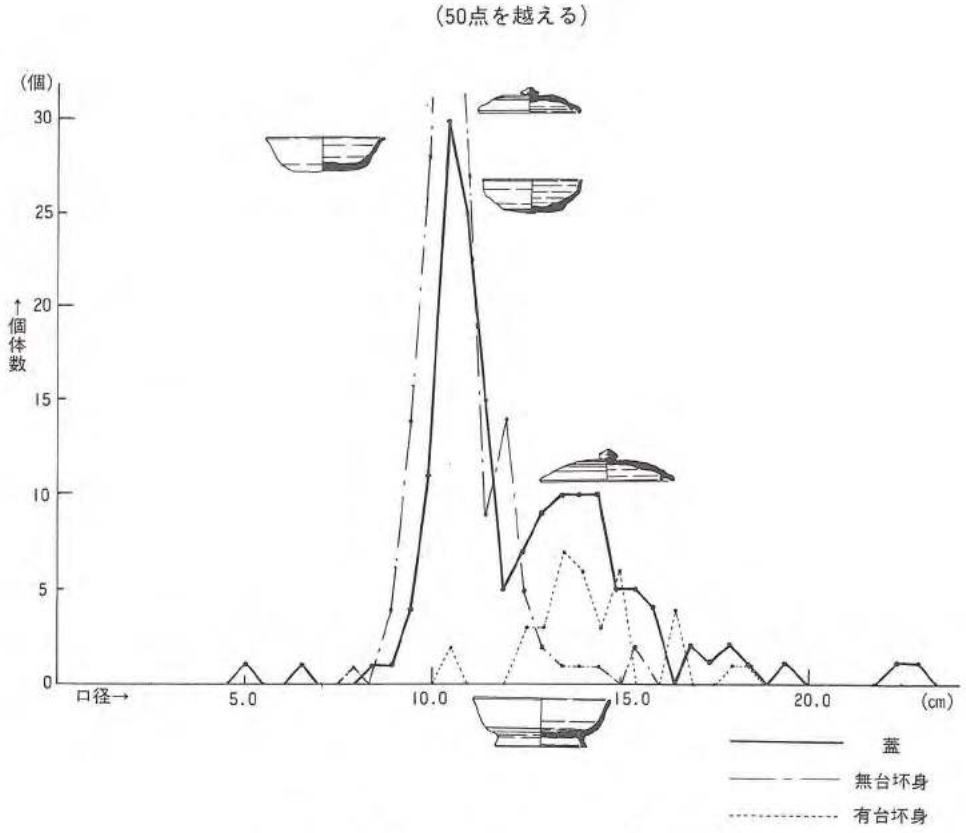



図-8　山ノ神遺跡灰原上層出土杯・蓋、口径対応表

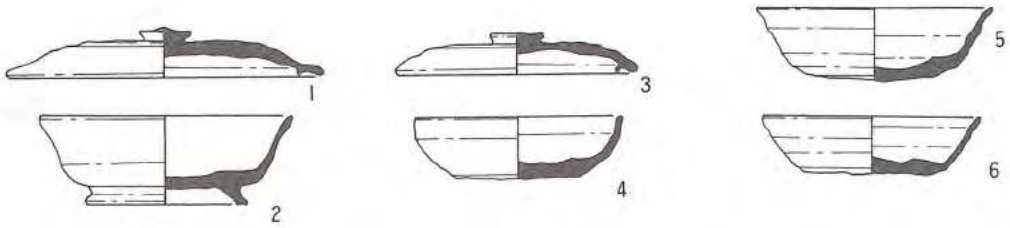



図-9　笠山古窯最終操業床面出土遺物

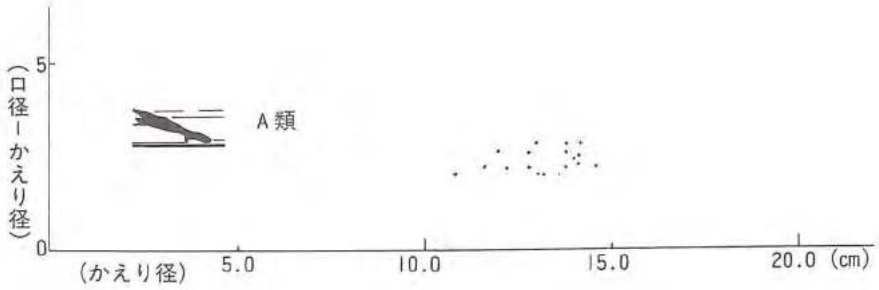



図-10　笠山古窯最終操業床面出土かえり付き蓋のかえり径と口径の関係

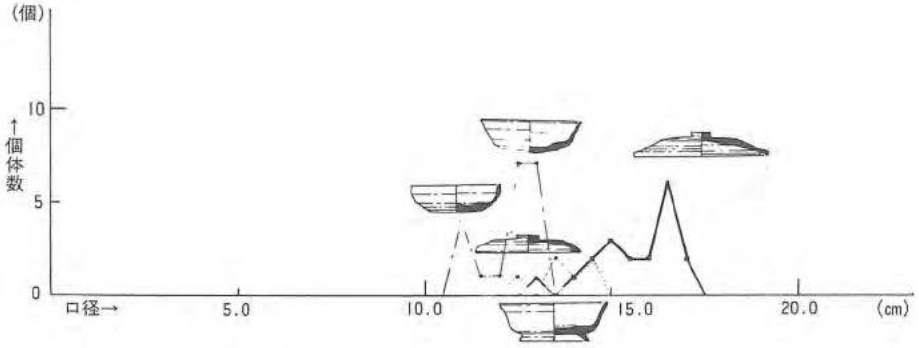



図-11　笠山古窯最終操業床面出土杯・蓋、口径対応表

須恵器有台杯身は、口径13.5cm前後に生産のピークが見られる。また、無台杯身の様に口径が多様化を見せないのとは対称的に、12～18cm程度までのちらばりを見せる点が特徴的である。これら有台杯身の口径は蓋の第２の生産のピークに対応すると考えられ、杯Ｂのセットを完成させている。

⑽　草津市笠山古窯最終操業床面出土遺物[11]（図版９―１～６）

前述の大津市山ノ神遺跡古窯に後続し草津市木瓜原遺跡古窯に先行すると考えられる須恵器窯の最終操業床面に残された土器群である。出土遺物の器種構成は、杯Ｇのセットと杯Ｂのセットと共に大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群と同様に杯Ａが出現している可能性がある。

無台杯身は、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類が見られる。

無台杯身Ｄ類は口径に対する器高の比率が22を中心とし、無台杯身Ｃ類は口径に対する器高の比率を30を中心としていることから木瓜原遺跡出土の無台杯身Ｃ、Ｄ類の分析の結果とは抵触しない。これらは口径13cm前後を中心とする。また、無台杯身Ａ類は口径11cmを中心とする点のみが明らかであり、生産の主体を占めない点が指摘できる。また、Ｂ類は１点のみ出土している。

有台杯身は、口径12.6～15.2cmのものがみられるが、器高は4.4～4.8cmを測り、器高を合わせる傾向があると指摘できる。高台は、しっかりとふんばり、初現期の有台杯身の様相をとどめている。

蓋は全てかえりを有するものであったが、口縁端部の形態も全てＡ類のみである。天井部外面

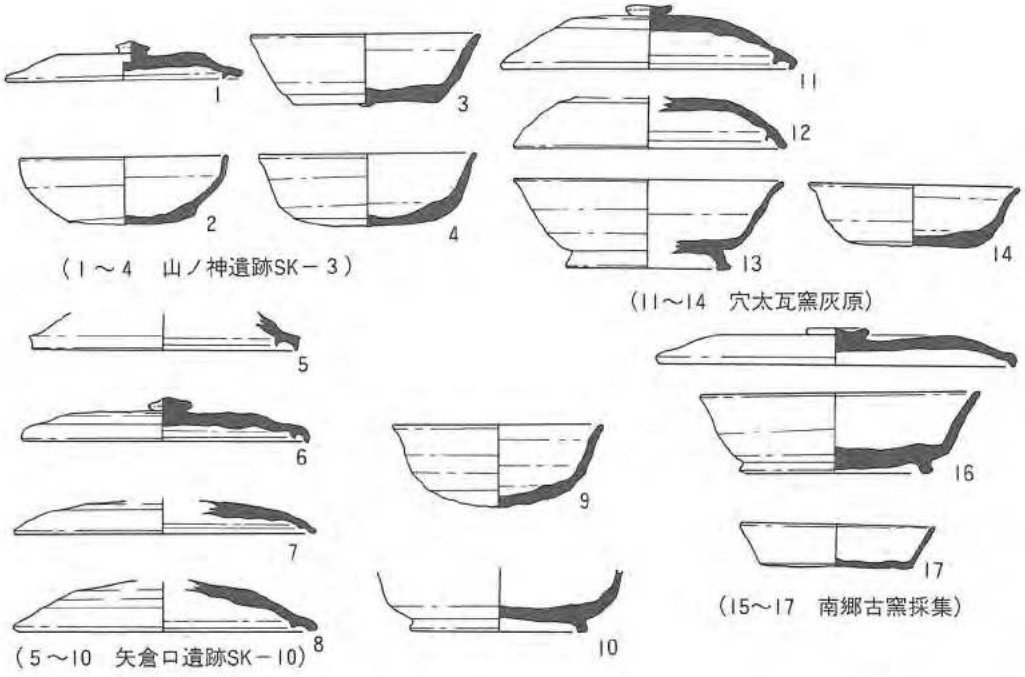



図-12　山ノ神遺跡、穴太瓦窯、矢倉口遺跡、南郷古窯出土遺物

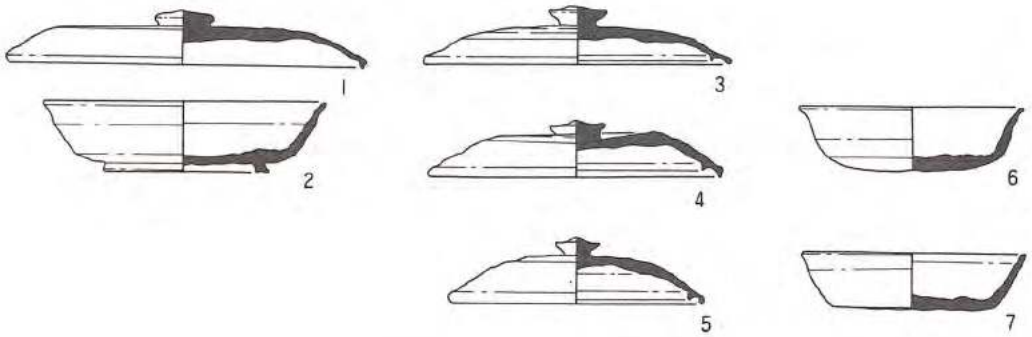



図-13　壺焼谷古窯灰原出土遺物

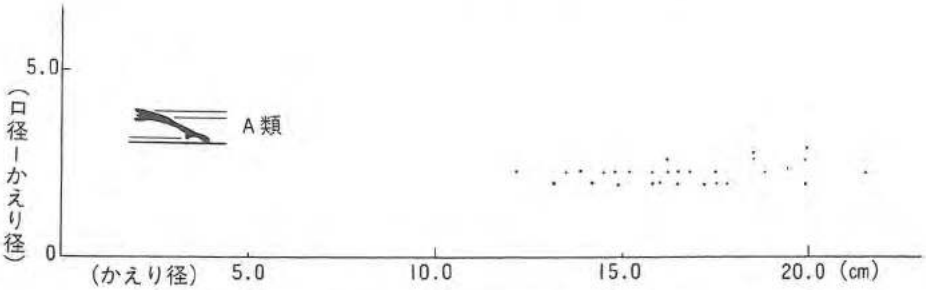



図-14　壺焼谷古窯灰原出土かえり付き蓋のかえり径と口径の関係　その1

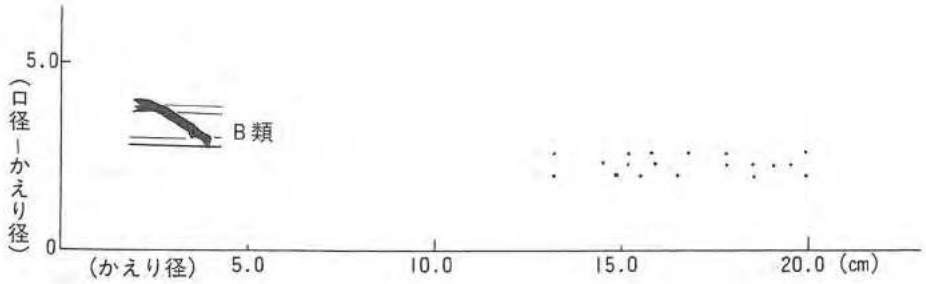



図-15　壺焼谷古窯灰原出土かえり付き蓋のかえり径と口径の関係　その2

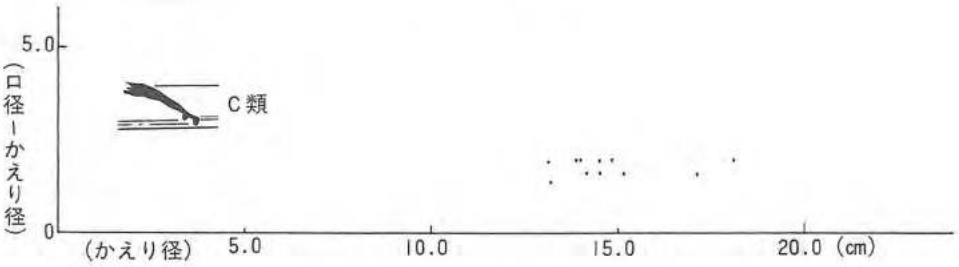



図-16　壺焼谷古窯灰原出土かえり付き蓋のかえり径と口径の関係　その3

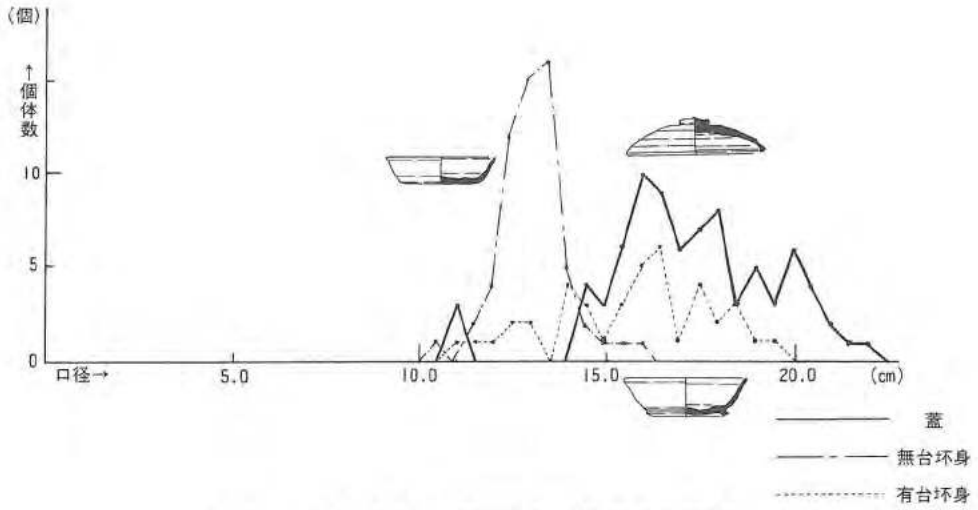



図-17　壺焼谷古窯灰原出土杯・蓋、口径対応表

は全て回転ヘラ削りを施し、その他の部分については横ナデを施す。つまみの形状はつぶれた菱型状を呈し、大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群と比較すると退化傾向が見られる。

これらの口径は12.8〜17cmまでと有台杯身の口径に合わせるようにバリエーションが見られるが、明確に無台杯身の口径に合わせていると考えられるものは１点のみであった。つまり、杯Bのセットとなると考えられるものが主体で、杯Gのセットと考えられるものが僅かにみられ、有台杯身、無台杯身の総数に比べて蓋の点数が不足する点から蓋を伴わないもの、つまり、杯Aが出現していると考えられる。

(11)　大津市穴太瓦窯灰原出土遺物[12]（図版12—11〜14）

穴太廃寺に瓦を供給したと考えられる瓦窯の灰原からの出土遺物である。瓦陶兼業窯であると考えられ穴太廃寺の創建、再建年代にもアプローチし得る資料であると考えられている。穴太廃寺の創建寺院は東へ振る建物であったが、天智朝の近江大津宮遷都にあたって錦織遺跡などにみられる北を指向する建物群に軸を揃え北を指向する建物へと建て替えられたと考えられている。

無台杯身は、C類が見られる。有台杯身は、高台のしっかりとふんばるものと、退化傾向の見られるものがある。蓋はかえりを有するもののみで構成され、端部の形状はA、C類がみられる。

(12)　八日市市壺焼谷古窯出土遺物[13]（図版13—１〜７）

湖南地域の資料ではないが、布引丘陵古窯址群の初現の窯であると考えられる。出土土器群の様相は、草津市笠山古窯須恵器窯最終操業床面出土土器群よりも後出し草津市木瓜原遺跡テラスⅢ出土土器群より若干先行すると考えられる。出土遺物の器種構成は、杯Gのセットと見られる小型の蓋は一定量見られないことから杯Aであると考えられ、その他杯Bが見られる。

ここでは、無台杯身C・D類が見られる。蓋はかえりを持つものと持たないものの両者がみられ、持つものは、端部A・B・C・Dが見られる。

有台杯身は、草津市木瓜原遺跡出土遺物と同様に高台の退化傾向を示すものが主となっている。

(13) 草津市矢倉口遺跡ＳＫ－10出土遺物[14]（図版12―５～12）

出土遺物の器種構成は、須恵器杯蓋、有台杯身、無台杯身、鉢、甕と土師器杯、甕である。

須恵器杯蓋は何れもかえりを有するものであり、Ａ・Ｃ・Ｄ類が見られる。この点からかえりを有するものばかりの出土であるが、かえり杯の蓋の系譜では最終末の段階を示す資料となると考えられる。つまり、Ｃ、Ｄ類はみられるもののかえりを有しない蓋が主体である草津市木瓜原遺跡テラスⅢ整地層出土土器群よりは先行すると考えられる。また、口径15cmを下回るものがみられないことから明確な杯Ｇは存在しないと考えられ、加えて、つまみの形状も偏平化が進んでいることから大津市穴太瓦窯の灰原出土土器群と概ね同様の時期の所産であると考えられる。須恵器無台杯身は、Ｃ類が見られる。須恵器有台杯身は、比較的内側に貼り付け高台を有し、高台の形状は初現期の杯Ｂとは異なり退化の傾向を示している。この点から草津市笠山古窯最終操業床面出土土器群よりも後出する要素を持つと考えられる。

(14) 木瓜原遺跡灰原下層テラスⅢ出土遺物[15]（図版18―１～８）

テラスⅢは須恵器窯の直下に位置し、操業途中で灰原の形成により廃絶を余儀なくされた工房であると考えている。ここでは整地層を２面確認しているが、下層の１面目は極少量の土器類と鉄塊を含むものであり、上層の２面目は多量の須恵器と、須恵器生産を行っていることを示す須恵器窯の窯壁を含むものである。上層整地層上面では完形品の須恵器が原位置で遺存しておりその後しばらくテラスが機能していたことを示している。その後、テラスⅢの上には約１m以上の灰原が形成されている。つまり、テラスⅢ整地層上層出土遺物は木瓜原遺跡の須恵器窯の操業の前半期を示すものであるといえる。

テラスⅢ出土遺物の内の無台杯身は形態から、Ｃ・Ｄ類が見られる。木瓜原遺跡出土遺物の無台杯身の中では大津市山ノ神遺跡灰原上層・中層や草津市笠山古窯出土の無台杯身Ａ・Ｂ類は見られず、その他灰原出土遺物の中でもほとんど見ることはなく一定量を占めることはない。

ここでは、無台杯身の内口径に対する器高の比率が２７、５を境にして、それより小さいものが無台杯身Ｄ類、それより大きいものが無台杯身Ｃ類となり、形態の差異が法量の差に対応するといえる。木瓜原遺跡に先行する草津市笠山古窯址出土の無台杯身Ｄ類は口径に対する器高の比率は22を中心とし、無台杯身Ｃ類は口径に対する器高の比率を30を中心としていることから本資料の結果とは抵触しない。

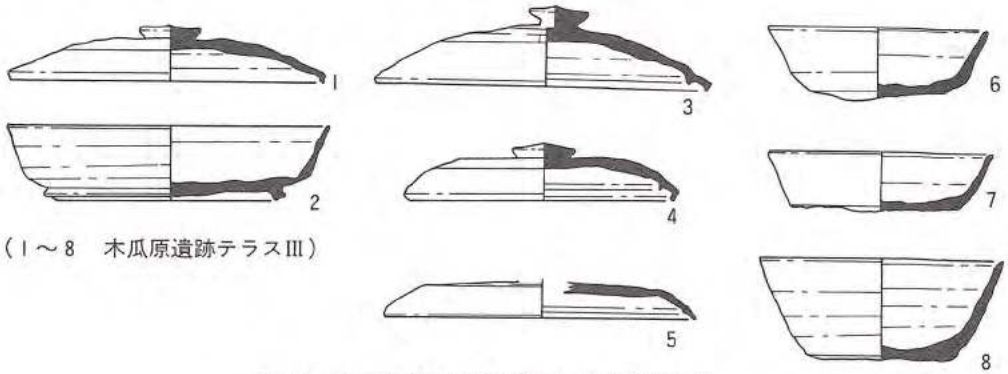
無台形態をとるものの中で無台杯身Ｃ類よりも口径と器高の比率の高いものがみられるが、これは、底部が平底状を呈し、無台杯身Ｃの系譜とは関連しないと考えられるため、碗Ａとして把えることとする。

蓋は、かえりを有するものと有しないものの両者がみられる。かえり付き蓋の端部の形状はＢ・Ｃ・Ｄ類がみられるが、出土した蓋の総量に比べると極めて少量であるといえる。

有台杯身は高台の比較的退化したものがみられる。

(15) 木瓜原遺跡須恵器窯最終操業床面出土遺物[16]（図版20―１～２）

須恵器窯最終操業床面に残された遺物はわずかであり最終操業時の器種の全てを示していると




（1～8　木瓜原遺跡テラスⅢ）

図-18　木瓜原遺跡灰原下層テラスⅢ出土遺物

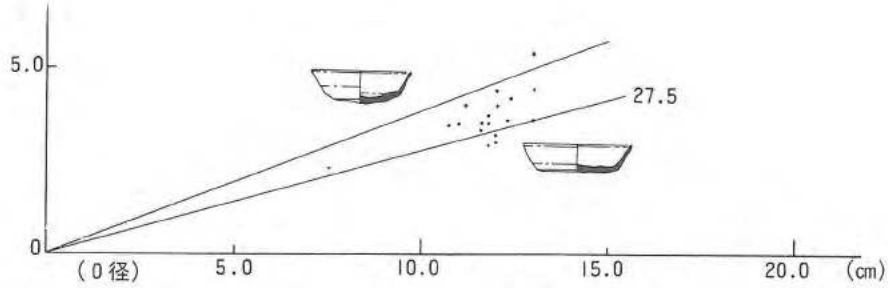



図-19　木瓜原遺跡灰原下層テラスⅢ出土無台杯身　口径器高対応表

図-20　木瓜古窯最終操業床面

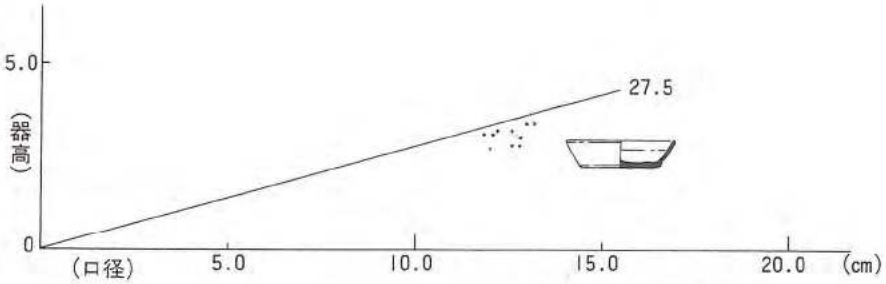



図-21　木瓜古窯最終操業床面出土無台杯身　口径・器高対応表

は考えられず、また、1回操業で全ての器種が焼成されるとも考え難い。しかし、ここでは木瓜原遺跡で最後生産された須恵器の様相を把えるという点で有用であると考え、ここに無台杯身の様相についてふれることとする。

須恵器窯最終操業床面出土遺物の全てはD類である。これらは口径に対する器高の比率が27.5を越えること無くテラスⅢ出土遺物の形態、法量ともに対応する。ここでは、操業の1回性という面もあるとは考えられるが、無台杯身D類のみしか見られず、次の段階にあたると考えられる南郷古窯址の出土遺物は無台杯身D類のみがみられることから全体的な傾向の中で評価できる可能性がある。

⑯ 大津市南郷古窯出土遺物[17]（図版12—15～17）

湖南地域に於いて瀬田丘陵古窯址群に後続すると考えられる窯跡群である。発掘調査が行われていないため詳細については不明であり今後の調査に期待するところが大きい。出土遺物の器種構成は、杯Bと杯Aのセットが見られる。

無台杯身は、D類のみが見られる。有台杯身も木瓜原遺跡出土のものに比べると形態的な変化がみられるといえる

### 3．土器群の変遷

以上の湖南地域の生産地、消費地資料を用いて、簡単に変遷を辿ってみたい。全体の傾向として一括資料の中に占める土師器の比率が概して低いため、基本的には須恵器の形態、組成からこれらの変遷を辿りたい。中でも小稿では形態の変化の顕著な無台杯身とかえり付き蓋について検討を行うこととする。

(1) 無台杯身の変遷

先学による須恵器研究から大きな画期としてとらえられているのが6世紀末から7世紀初頭にかけての時期に出現するという杯G、いわゆる宝珠つまみ付きの蓋を持つセットの成立である。この段階から出現する無台杯身について湖南地域の様相をとりまとめたい。

a．杯Hの消滅

現段階で滋賀県下の生産遺跡において出現期の杯Gのセットと杯Hのセットが良好に確認されている例は無い。従って、消費地の資料からしかそれをうかがう術は無いのであるが、墳墓、住居址等から両者が良好な状態で遺存していることも現時点ではあまり見られず状況を明確に把握することは困難なのである。

その中で比較的良好な出土状態を示す大津市横尾山古墳群出土土器群（図版2—4～12）と大津市山ノ神遺跡灰原下層出土土器群（図版3—1～4）には初現期の杯Gのセットは見られないものの、杯Hのセットとの共伴関係が確認されており、何れも杯Bのセットを含まないことから山ノ神遺跡灰原上層出土土器群の段階にまでは存続しなかったことを示している。また、山ノ神遺跡灰原中層、灰原上層出土土器群の中に若干量の杯Hは見られるものの積極的に生産が盛んに行われていたとするには問題がある。

以上の点から、一定量の生産を行うという点での杯Hの終息は、大津市山ノ神遺跡灰原中層出

土土器群の段階にあるといえる。

b．無台杯身の調整方法の変遷

大津市山ノ神遺跡灰原下層出土土器群は出土点数の問題などをふまえて横尾山古墳群のそれぞれの一括資料をこの段階のものと読みかえると、大津市横尾山古墳群12、23、26号墳出土の無台杯身（図版３―５・７・11）は調整は、基本的には底部切り放し後不調整である。一方、瀬田地域の出土例ではないものの大津市太鼓塚８号墳出土の杯Ｇの一群（図版３―２）は、底部回転ヘラ削りが施されている。また、つまみの形状も一般的にいわれる初現期のものであると考えられる（図版３―１・３）。

以上の点から、大津市太鼓塚８号墳出土器群は大津市横尾山古墳群12、13、23、26号墳出土土器群よりも先行する一群であると把えることが可能であると考える。以降、湖南地域では無台杯身の底部の調整方法に関しては不調整が基本的であるといえる。８世紀代の消費地資料の大津市野畑遺跡出土の無台杯身に底部回転ヘラ削りを施すものがみられるが、胎土、発色の違いなどからおそらくは南郷古窯址群のものとは異なるものであると考えられる[18]。

c．無台杯身の口径の変遷

これらの無台杯身Ａ、Ｂ類の口径は10cm前後である点に留意したい。大小はあるものの、大津市山ノ神遺跡灰原中層出土土器群の無台杯身の口径のピークは10cm前後（図版６）、大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群の無台杯身の口径のピークも同じく10～11cm前後（図版８）であるのに対し、これらに後出すると考えられる草津市笠山古窯最終操業床面出土土器群のＣ、Ｄ類の口径は12～13cm前後（図版11）を中心としているのである。また、無台杯身の生産量が蓋の生産量を上回っている大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群の中でも、12～13cmに一つのピークを成している点から、この傾向の萌芽が見られるといえる。更に後出する八日市市壺焼谷古窯出土土器群（図版17）や草津市木瓜原古窯出土土器群（図版19・21）などに見られる様に、７世紀末から８世紀代にかけての無台杯身の口径は12～13cmを中心としている。Ｄ類は形態的には出現期から同様の傾向を持つものであるが、八日市市壺焼谷遺跡灰原出土遺物の頃から無台杯身の中で一定量を占めた時点で口径が拡大するともいえる。

無台杯身の生産に関して口径のピークが10cm前後から12～13cm前後と変化する点については、食器組成の大きな変化があると考えられる。それは即ち、杯Ｇのセットとしての無台杯身の口径の中心が10cm前後であったことである。杯Ｇ、それ自体の口径の拡大化の傾向はみせないものの、新たな流れとしての蓋を伴わない無台杯身が、口径12～13cm中心として出現したと把えることができ、以降、８世紀にかけて口径12～13cmの無台杯身、即ち杯Ａとなっていくと想定できるのである。

d．無台杯身の類型毎の消長

大津市太鼓塚８号墳出土土器群に見られる様な杯Ｇのセット（図版２―１・２）は、大津市横尾山古墳群出土土器群では見られず、杯Ｈの蓋の製作技法を用いて逆転させたような形態を持つＡ類（図版２―５・７）と、底部切り放し後の調整を行わないＢ類（図版２―12）が見られる。つまり、大津市太鼓塚８号墳出土土器群で見られたものは後続せず、原則として底部の調整を行

わないA、B類が主となる。

口縁部に強いナデを施し直立させる点に特徴を持つA類は、大津市山ノ神遺跡灰原中層（図版4—2）、灰原上層出土土器群（図版7—4）の段階までは一定量の生産を行っているものの、草津市笠山古窯最終操業床面出土土器群（図版9—4）に到っては生産量は比較的少ないといえる。以降、草津市木瓜原古窯、大津市南郷古窯址群では見られない。また、口径は10〜11cm前後を中心とする。

丸みを帯びた2次底部面から直立気味に立ち上がる口縁部をもつB類は、大津市山ノ神遺跡灰原中層（図版4—8）、灰原上層出土土器群（図版7—5）の段階まで見られるが、大津市穴太瓦窯灰原出土土器群の段階に到っては1点が見られるのみで、後出する草津市木瓜原古窯、大津市南郷古窯址群ではほとんど見られない。また、口径は10〜11cm前後を中心とする。

丸みを帯びた2次底部面から外方に開く口縁部をもつC類は、杯Gの生産を主体とする大津市山ノ神遺跡灰原中層出土土器群では見られず、蓋の生産量を凌ぐ無台杯身の生産が行われている大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群（図版7—6）から一定量が見られる。以降、草津市笠山遺跡最終操業床面出土土器群（図版9—5）、草津市木瓜原古窯出土土器群（図版18—6）で見られ、大津市南郷古窯址群ではあまり見られない。基本的に口径と器高の比率は27.5以上のもので占められ、D類と比較すると深味のある器形が見られることとなり（図版19）、更に口径と器高の比率が32.5を越えるものも見られる。また、口径は12〜13cmを中心とする。

平たい底部から外方に開く口縁部をもつD類は、大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群（図版7—7）から徐々に見られはじめ、大津市南郷古窯址群出土土器群（図版12—17）に到るまで安定した生産を続けている。基本的には口径と器高の比率は27.5を越えることがないことを特徴とし、深味のある器形は見られることがない（図版19・21）。また、口径は12〜13cmを中心とする。

e．小結

杯G、或いは杯Aという供膳形態をとるもののの中での主となる器種としての無台杯身の変遷を辿る作業を行った。以上の視点から導き出された画期についてふれたい。

杯Gの出現と共に注目されるのが杯Hの消滅である。湖南地域の生産地では大津市山ノ神遺跡灰原下層の段階以降、明確に生産を続けているとはいえない。しかし、灰原下層と灰原中層の段階の杯Gを比較すると個体としては大差無く、セット関係以外で判断する要素を持たない。また、大きな消費の時間単位としては灰原中層と灰原下層は共存するのかも知れない。また、杯Hとの共存関係からみると灰原下層は杯Hが主体であり、灰原中層は杯Gが主体であることから徐々に構成が移り変わっているともいえる。この点については今後の資料の増加を待ちたい。

調整方法については、滋賀県下の他地域の古墳出土の杯Gが底部回転ヘラ削りが施されているように大津市太鼓塚8号墳出土土器群にも見られるものであるが、それ以降は、体部から口縁部にかけての内外面には横ナデを施し、底部外面は切り放し後調整は施さないというのが基本的である。基本的に9世紀代に到るまでこの状況は継続すると考えられる。

また、7世紀から8世紀にかけての湖南地域で見られる無台杯身を形態からA、B、C、Dの4類に分けそれぞれの消長について状況をうかがった。（表1）

A類は、口縁部に強いナデを施し直立させるもので、古墳時代通有の杯Hの蓋を逆転させた様な形態をもつものである。口径は、10～11cm前後を中心とする。横尾山古墳群出土土器群からみられ、一定量の生産は大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群まで見られ、以降草津市笠山古窯最終操業床面出土土器群では生産量を減じ、草津市木瓜原古窯出土土器群ではほとんど見られなくなる。草津市笠山古窯と草津市木瓜原古窯との間には明らかに型式差が見られることからそれを補完すべく滋賀県下の資料を見ると、個体数が少ないため問題は残るものの大津市穴太瓦窯灰原出土土器群では既に姿を消しているといえる。また、草津市矢倉口遺跡ＳＫ－10出土遺物にもＡ類は見られない。故に、草津市笠山古窯最終操業床面の段階を最後に姿を消すのではないかと考えられるのである。

B類は、丸みを帯びた２次底部面から直立気味に立ち上がる口縁部をもつものである。口径はA類と同様に10～11cm前後を中心とする。A類と同様に大津市横尾山古墳群出土土器群から見られ、一定量の生産は大津市山ノ神遺跡灰原上層まで見られ、草津市笠山古窯最終操業床面出土土器群では明確にB類と認識し得るものはなく、草津市木瓜原古窯出土土器群では見られなくなる。また、草津市矢倉口遺跡ＳＫ－10では見られないが、大津市穴太瓦窯灰原出土土器群の中には１点のみ見られるため、一定量の生産は大津市山ノ神遺跡灰原上層の段階を最後にし、徐々に生産量を減じていくものであると考えられる。

C類は、丸みを帯びた底部から外方に開く口縁部をもつものである。口径は、12～13cm前後を中心とする。口径と器高の比率は27.5を越えるもので構成される。C類と認識し得るものは大津市山ノ神遺跡灰原中層から若干量が見られ山ノ神遺跡灰原上層の段階以降は一定量の生産が確認できる。草津市木瓜原遺跡出土土器群の中でも一定量の生産が確認できるが、現段階では大津市南郷古窯では見られない。このC類の消滅については今後の資料の増加を待ちたい。

D類は、平たい底部から外方に開く口縁部をもつものである。C類と同様に口径は12～13cmを中心とする。口径と器高の比率は27.5以下のもので構成される。D類と認識し得るものは大津市山ノ神遺跡灰原上層の段階で若干量の生産が確認され、以降、大津市南郷古窯址群でも生産が確認できる。

以上の点から、A、B類は蓋を有するもので杯Gのセットになり得るものとして生産されたのではないかと想定され、C、D類が蓋を持たない杯Aになるものとして生産されたのではないかと想定されるのである。

(2) かえり付き蓋の変遷

先学による須恵器研究から大きな画期としてとらえられているのが６世紀末から７世紀初頭にかけての時期に出現するという杯G、いわゆる宝珠つまみ付きの蓋を持つセットの成立である。この段階から出現するかえり付き蓋について湖南地域の様相をとりまとめたい。

a．かえり付き蓋の調整方法の変遷

蓋の調整方法の着眼点は、天井部外面の調整の有無が主となる。大津市横尾山古墳群出土土器群（図版２―４）や、大津市山ノ神遺跡灰原中層出土土器群（図版４―１）などでは天井部外面の調整は切り放し後丁寧なナデか、回転ヘラ削りを施している。それ以降、草津市笠山古窯最終

操業床面出土土器群（図版９―１・３）では全て回転ヘラ削りを施すのに対し、草津市木瓜原遺跡灰原下層テラスⅢ出土土器群（図版18―１・３・４・５）では天井部外面に回転ヘラ削りを施すものは極めて低い比率で見られるのみで大半は切り放し後不調整、或いはその後軽いナデを施している。

ｂ．かえり付き蓋の口径の変遷

無台形態の杯身は、必ずしも蓋が存在しなくても存在し得るものではあるが、蓋は、基本的には身があってこそ存在するものである。この視点からそれぞれの一括資料の中でどの様に対応していくのかについてふれてみたい。

大津市山ノ神遺跡灰原中層出土土器群の蓋の口径には11cmを中心に大きなピークが一つ見られる（図版６）。この点から、口径10cm前後の無台杯身Ａ・Ｂ類に対応するものが中心であるとすることが出来る。一方、大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群の蓋の口径には２つのピークがみられ、まづ最大のピークを10.5cmにとり、14cm以降にもそれに準ずるピークをもっている（図版８）ことから灰原中層とは異なり、後者のピークは12～18cmまでちらばりをみせる有台杯身の口径に対応するものであると考えることが出来る。良好な一括資料が見あたらないことから湖南地域のものではないが型式的に後出する布引丘陵古窯址群の壺焼谷遺跡灰原出土資料（図版17）を見ると14～20cmを越える範囲まで蓋の口径がみられるが、小型品は基本的にはみられない。また、口径13～13.5cmを中心とする無台杯身に対応する蓋は基本的には無いのではないかと想定される。つまり、無台杯身は蓋をもたないことが主となると考えられるのである。

以上の点から、おそらくは草津市笠山古窯最終操業床面出土土器群以降は無台杯身には蓋が伴わないものが主となったと考えることが出来るのである。

ｃ．かえり径と口径の変遷

かえり付き蓋に伴う「かえり」と口径の関係がどの様なものであるかについて、それぞれの一括資料を用いてふれてみたい。ここでは蓋に伴う杯身との関係を表すものとして口径とかえり径の差を縦軸に、かえり径を横軸にグラフ化しているが、それぞれの端部の形態に伴う特性を抽出するために行うものである。

大津市山ノ神遺跡灰原中層出土土器群の蓋は全て端部Ａ類で口径11cm程度のものを中心とするがかえり径との差は２cm前後を中心とする（図版５）。草津市笠山古窯最終操業床面出土土器群の蓋は全て端部Ａ類で口径13～17cmまでのものがみられるが、差は２～３cmとなる（図版10）。また、湖南地域出土のものではないのであるが八日市市壺焼谷遺跡灰原出土土器群から様相を推し量るものとする。端部Ａ類は12～21cmまでのものがみられるが、差は２～３cmとなる（図版14）。端部Ｂ類は13～20cmまでのものがみられるが、差は２～３cmとなる（図版15）。端部Ｃ類は13～18cmまでのものがみられるが、差は２cmを切っている（図版16）。

以上の結果から指摘し得る点は、小型のものが多い杯Ｇも杯Ｂも口径とかえり径の差はさほど大きくなく、どちらかというと杯Ｇの方が間を狭めて作っているといえるかもしれないが、２～３cmの間に収めるということを基本としているといえる。一方、八日市市壺焼谷遺跡灰原出土土器群は基本的には全て杯Ｂに伴うと考えられるが、端部Ｃ類のみが異なる傾向を示していることが

指摘できる。これは、蓋の大まかな成形が終わった後にかえりを接合し、その後に端部を下方に屈曲させるために、口径とかえり径との差が従来の平均値を割ってしまったのであるといえる。蓋が平均2～3cmの差でそれぞれの有台杯身の口径に合わせて製作されているとするならば端部C類のあり方は製作の精度・難易度を高めている作業であるといわざるを得ない。しかし、ここでは難易度を高めるための作業であると把えるのではなく、同じくかえり付き蓋の最終段階で出現した端部B・Dとともに既にどこかで出現していたであろうかえりをもたない蓋（この種の蓋の出現は、たとえば薬壺の蓋等の影響、或いは新羅の土器の影響が挙げられる）の影響を受けて製作された過渡的なものであるととらえたい。これらの端部B・C類は何れもかえりを取ると8世紀前半代に通有の蓋の形態になることも傍証とすることができるだろう。一方、D類はかえりが退化するという方向性を示している。金属器模倣の流れから出現したと考えられている杯Gのセットの形状は素材の違いを越え模倣の対象となったが、この段階を迎えて製作の上で省略し得るものとして顕著な退化を見せているといえるだろう。

d．かえり付き蓋のつまみの形状の変遷

かえり付き蓋に伴うつまみの形状がどの様なものであるかについて、それぞれの一括資料を用いてふれてみたい。つまみの形状が規定的なものになり得るものではないが一連の動きの中での生産地の動向をうかがうことを主眼とする。

比較的端正な宝珠形を保っているのは大津市太鼓塚8号墳出土土器群（図版2—1）から大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群（図版7—1・3）に到るまでで、草津市笠山古窯最終操業床面出土土器群（図版9—1・3）から退化傾向が目立ってくるといえる。

e．かえり付き蓋類型毎の消長

口径10cm前後のものには現時点では端部Aのみしか見いだせない(図版9—3)。つまり、かえり付き蓋の最終段階であると想定する端部B・C・D類とは共存することがなく、最終段階を待たずに杯Gのセットは消滅したいといえる。換言すると、杯Bが杯Gと共存している段階では端部は基本的にはA類のみであるといえる。かえり付き蓋の最終段階となって端部B・C・D類が出現するが、かえりを持たない蓋と共存しているのか否かについては現時点では明らかにすることは出来ないが京都府新宗谷遺跡灰原出土土器群等にも見られることから地域毎に独自に変化していったのではなく伝播していった可能性も有り得る。草津市木瓜原遺跡ではこれらの端部を持つものは若干量見られる（図版18—3～5）が何れもかえりを持たないものと共存しているといえる。一方、草津市矢倉口遺跡ではかえりを持つもののみA・B・C・D類が見られる（図版12—5～8）。

f．小結

杯G或いは杯Bに伴う蓋の変遷を辿る作業を行った。以上の視点から導き出された画期についてふれてみたい。(表1)

調整方法については、主として天井部外面の回転ヘラ削りの有無を観察の軸とした。回転ヘラ削り或いは切り放し後丁寧なナデを施すものと、切り放し後不調整か軽く工具或いは手を用いてナデるものに2分される。その画期は、生産遺跡出土資料からは、草津市笠山古窯床面出土土器

群と草津市木瓜原遺跡灰原下層テラスⅢ出土土器群の間にあるといえる。また、形態的な問題などからこれらの窯跡の間には１カ所以上の生産地があると考えられることから消費地資料に依拠せざるを得ないところであるが、消費地資料も大津、草津市域では当該期には良好なものが現時点では見あたらないため保留としておきたい。

また、つまみの形状であるが、比較的端正な宝珠形を保っているのが大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群までであり、草津市笠山古窯最終操業床面出土土器群からは退化傾向がみられる。

これらの蓋の口径は有台杯身、無台杯身の口径と対応させることによって数字の上でのセット関係が推定することが出来るものであるが、一つの画期として、有台杯身が出現している大津市山ノ神遺跡灰原上層出土土器群の蓋は10.5cmと14cm以降にもピークが見られることから、同遺跡灰原中層出土土器群と同様に10.5cmつまり杯Ｇに対応するものであり、14cm以降にも見られるピークは同遺跡灰原中層出土土器群の対応グラフにみられなかった新たなものでありこの段階になって出現した有台杯身に伴うものであると考えることが出来るだろう。また、この段階では蓋の端部の形状は何れもＡ類のみである。

こういった傾向は草津市笠山古窯床面出土土器群にも見られるが、小型の蓋の数量が数を減じていることに着目したい。ここでも徐々に変化していく過程がうかがわれるのである。

この傾向が全く変化してしまうのは草津市笠山古窯最終操業床面出土土器群以降草津市木瓜原遺跡テラスⅢまでの間であると考えられる。木瓜原遺跡出土の資料は現在整理途中であることから明確にすることが出来ないため八日市市壺焼谷遺跡灰原出土土器群を用いて様相をうかがうと、14～20cmを越える範囲まで蓋の口径がみられるが、小型品は基本的にはみられず、口径13～13.5cmを中心とする無台杯身に対応する蓋は基本的には無いのではないかと想定されるのである。つまり、無台杯身は蓋をもたないことが主となると考えられるのである。また、杯Ｇのセットが明確にみられなくなり杯Ｂのセット杯Ａで構成されるようになって端部にバリエーションがみられＢ・Ｃ・Ｄ類が出現する。大津市穴太瓦窯灰原出土土器群も明確な杯Ｇのセットは見られず、端部Ａ・Ｃ類が見られるのである。また、地域は異なるが天武５年と考えられる木簡と共伴している中主町西河原湯ノ部遺跡Ｔ25ＳＤ01出土土器群は端部Ｂ・Ｃ類がみられるが杯Ｇのセットは明確に確認することは出来ない。

また、端部Ｃ類のあり方は、製作の難易度を高めるための作業であると把えるのではなく、同じくかえり付き蓋の最終段階で出現した端部Ｂ類とともに既にどこかで出現していたであろうかえりをもたない蓋の影響を受けて製作された過渡的なものであるととらえたい。これらの端部Ｂ・Ｃ類は何れもかえりを取ると８世紀前半代に通有の蓋の形態になることも傍証とすることができるだろう。加えて、Ｄ類のあり方から、一方では「かえり」が省略し得るものとしてこの段階になって顕著な退化を見せたといえるだろう。

## ４．おわりに

大津市南部、草津市域を中心に７世紀代の土器様相を良好な一括資料からうかがった。加えて、これらの資料を元に器種のセット関係、器形の変遷について若干ふれた。ただ現時点では、充分

| 杯H | 杯G | 杯A | 杯B | 無台杯身 A | 無台杯身 B | 無台杯身 C | 無台杯身 D | かえり付き蓋 A | かえり付き蓋 B | かえり付き蓋 C | かえり付き蓋 D | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | | ・山ノ神遺跡灰原下層<br>・太鼓塚８号墳<br>（底部回転ヘラ削り）<br>・横尾山26号ｂ・19号・23号・12号<br>（杯Ｈのセット主体） |
| | | | | | | | | | | | | ・山ノ神遺跡灰原中層<br>（杯Ｈ消滅？・杯Ｇのセット主体）<br>・山ノ神遺跡ＳＫ-3<br>（無台杯身Ｃ類出現）<br>・山ノ神遺跡灰原上層<br>（杯Ｂのセット出現・無台杯身Ｄ類出現・杯Ａが出現している可能性！）<br>・笠山古窯最終操業床面<br>・壺焼谷遺跡灰原<br>（無台杯身Ｃ・Ｄ類のみ・蓋Ｂ・Ｃ・Ｄ出現・杯Ｇのセット見られない・無台杯身Ｄ類の口径拡大化）<br>・穴太瓦窯灰原<br>・矢倉口遺跡ＳＫ-10<br>（かえり付き蓋の最終段階？かえりを持たない蓋のみで構成される！）<br>・木瓜原遺跡テラスⅢ<br>（かえりを持たない蓋が主体）<br>・南郷芋谷遺跡灰原<br>（無台杯身はＤ類が主体） |

に資料を消化していないことから更なる問題点の提示を行うことは出来ず、ひたすらに現状の整理と理解を自分なりに行ったに過ぎない。加えて小稿では有台杯身の変遷については明確な変化の基準を設定することが出来ず、また、実年代とのクロスチェックを行うこともできなかった。今後、更に検討を加えることにより小稿で犯すこととなった過誤並びに不備を補っていきたい。中でも、小稿で明らかにし得なかった杯Hの変遷については、稿を改め論じる予定である。

小稿を作成するにあたっては石原道洋・辰巳和弘・萩本勝・林博道・藤沢真依・三宅弘各氏の御指導・御教示並びに資料の実見にあたって御厚意を頂いた。記して感謝の意を表します。

（追記）脱稿後に草津市観音堂遺跡の発掘調査の成果が明らかにされた。その内容は、須恵器窯3基と炭窯1基からなるもので、そのうち1基の窯体内からは土器群が良好な状態で出土していた。これらの土器群はかえりを持たない蓋を含むもののかえりを持つ蓋がその主体を占めているようであり木瓜原遺跡灰原下層テラスⅢ出土土器群よりも先行する組成を持っており、端部の形態もB・D類の端部も多くみられている。また、一瞥した限ではあるが、無台杯身に関してはC類が主体をなくすようであり笠山古窯最終操業床面出土土器群よりも後出する要素を持っているといえる。小稿でもこれらの両者の間には生産地が1ヵ所以上存在すると考えているがまさにそれにあたるものである。また、かつて笠山古窯の出土遺物の検討を行った際（拙稿「笠山古窯出土遺物の紹介」『紀要』第6号　滋賀県文化財保護協会　1993）に窯跡の移動の想定から笠山古窯に後出するものとして木瓜原遺跡一野路小野山遺跡のラインの谷筋の南側の谷筋に立地する新池遺跡と三ッ池遺跡を内容不詳ながらその候補に挙げていた。今回は観音堂遺跡と笠山古窯と木瓜原遺跡を繋ぐ生産地の一つとして確認されたものであるが、三ッ池遺跡一新池遺跡と同一谷筋上に生産地が確認されたことについては、窯跡の移動の想定が大きく違っていなかったことを示すものである。今後の観音堂遺跡の遺物の整理調査の進行にともなって大津・草津市域の古代土器様相がより明確になると思われる。

また、滋賀県下での土器研究に関しては7世紀代については全国的に重要な位置を占めているといえる。それは、天智朝の近江大津宮遷都に関わる問題である。文献資料との対比や、紀年銘をもつ木簡の出土などから実年代とクロスチェックすることが可能な飛鳥・藤原地域で、おそらくは天智朝にあたるであろう飛鳥Ⅲに相当する須恵器が明確にされないことが指摘されており、近江大津宮推定地の錦織遺跡出土の土器群或いは山ノ神遺跡の須恵器窯出土の土器群の評価が期待されているものである。とはいえ、近江大津宮推定地である錦織遺跡出土の土器は現時点では微量しか出土しておらず、また、周辺の湖西線関係遺跡として発掘調査されたVD区大溝や北大津遺跡の南北溝出土土器群も混入が多く必ずしも良好な一括資料とはいえず、加えて、問題の核心たる錦織遺跡周辺の土器様相は必ずしも明きらかではないのである。以上のような現状があるものの、須恵器窯跡出土の資料は発掘調査によって蓄積されつつあることからそれを整理し、何時の日にか問題の核心である近江大津宮からの出土土器群との対比を行うことが出来るのではないだろうか。

註

(1) 畑中英二「6世紀と7世紀須恵器生産における質的問題—近江における分布状況を中心に—」(『滋賀考古』第10号　滋賀考古学研究会　1993年)

(2) 吉水真彦・松浦俊和『滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書Ⅰ—太鼓塚古墳群』(大津市教育員会　1980年)

(3) 造酒豊・横田洋三ほか『横尾山古墳群発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1988年)

(4) 註3に同じ

(5) 註3に同じ

(6) 註3に同じ

(7) 須崎雪博『山ノ神遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(大津市教育委員会　1991年)

(8) 註7に同じ

(9) 岡本武憲『山ノ神遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1986年)

(10) 註7に同じ

(11) 畑中英二「滋賀県草津市笠山古窯出土遺物の紹介」(『紀要』第6号　滋賀県文化財保護協会　1993年)

(12) 林博通・葛野泰樹「滋賀県大津市穴太遺跡の瓦窯跡」(『考古学雑誌』第64巻第1号　日本考古学会　1978年)

(13) 石原道洋『壺焼谷遺跡発掘調査報告書』(八日市市教育委員会　1991年)

(14) 谷口智樹ほか『矢倉口遺跡発掘調査報告書』(草津市教育委員会・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1987年)

(15) 畑中英二「滋賀県における須恵器生産概観」(『鐵冶かす古代の近江』レジュメ　滋賀県文化財保護協会　1993年)

(16) 註15に同じ

(17) 南郷芋谷遺跡採集資料

(18) これらの土器群は和泉陶邑古窯址群のものと類似しているではないかと考えている。和泉陶邑古窯址群出土遺物の実見にあたっては大阪府泉北考古資料館　藤沢真依氏、平安高校　萩本勝氏に便宜をはかって頂いた。記して謝意を表します。

## 編集後記

今年度は雨が多く冷夏であり、どの現場もいたずらに排水作業を繰り返し時間に追われて苦悩の日々を過されたことと思います。本紀要も、第7号を迎え、本号には予想を越える14編の論考を掲載することが出来ました。調査に追われながらも、日頃の各自の問題意識と研鑽の結果であるといえるでしょう。本号が「近江」や「文化財」への理解の一助となり、読者の方々からの御指導、御鞭撻が賜れれば幸いです。

5701 K
滋賀県文化財保護協会蔵書
256

平成6年3月

紀　要　第7号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印　　刷　宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241